

タイ国で発生した大洪水の緊急現地調査報告

資源循環工学研究領域 水資源工学担当 皆川裕樹

タイ国チャオプラヤ川流域で発生した大洪水について、農工研から3名の研究者がタイを訪問し、緊急現地調査を行いましたのでその概要を報告いたします。

調査期間：H23年11月23日～11月30日

調査メンバー：増本上席（水資源工学）、堀川主研（水文水利）、皆川研究員（水資源工学）

調査の概要：本調査では、洪水に関連する重要施設・地点を選択し訪問しました。まず流域内の北部にあるプミボンダム（総貯水量約130億トン）およびシリキットダム（約95億トン）、中部のチャオプラヤダム、パサックダム（約9.6億トン）において今年度の状況を聞き取り、関連資料を収集しました。さらに天然資源・環境省水資源局やタイ気象局などの行政部局、チュラロンコン大学も訪問し、同様に情報を収集しました。また、移動の際には流域内の農地や都市部の洪水を目視し、状況を把握してきました。

1. 2011年タイ洪水の概要

チャオプラヤ川流域では毎年のように洪水が発生しますが、今年は50年に1度の大洪水だと言われています。下流の低地に位置する工業地帯（アユタヤ、ナワナコンなど、日系企業も多い地域）やバンコク市内にも水が迫ってきたことから、日本でも大きく報道されました。

今年はタイ北部などで例年より早い時期から雨量が増加し、6～9月にも台風や低気圧の影響で大きな降雨イベントが発生しました。8月にはナコンサワン地区まで洪水が発生し、9月にはチャオプラヤダム付近で堤防が決壊したため、10月中旬には下流の工場地帯に水が迫りました。その後、洪水がさらに南下してバンコク市内まで到達しました。調査に行った11月末の時点では徐々に水が引いていましたが、タイ中部からバンコク市内において未だ湛水している地区が見られました。

2. 洪水の状況（撮影日：11月24～28日）

①地点：

チャオプラヤダムの少し上流にあたる地区で、土嚢を積み水の浸入を防いでいる状況です（Pic.1）。この付近では河川堤防がいくつも破堤し、水が農地に流入していきましました。ある地点では洪水により道路が寸断されていました。



Fig.1 チャオプラヤ川流域と主な調査地点



Pic.1 土嚢による堤防の補修（①地点）

②地点：

広大な農地が広がるエリアです。見える範囲は見渡す限り湛水しており(Pic.2)、道路脇の住居では今もなお浸水被害を受けている状況が見られました。電信柱や家の壁に残った洪水の跡から、ピーク時には道路面より水位が高かったことがうかがえました。

③地点：

日系企業も多く参入しているナワナコン工業団地の様子です(Pic.3)。この辺りはもともと農地であったため標高が低く、訪れた 27 日の時点で約 1m の湛水がありました。最大ではさらに 1m 程度水位が高かったと予想されます。新聞報道等によると、この地区にある約 190 社の工場のうち 104 社までもが浸水被害にあったようです。水が引くにはまだまだ時間がかかる様子で、現地の従業員がボートを使って工場の機材を運び出していました。

④地点：

タイ北部から流れてくる水をバンコクの北側で東西に排水するランシット水路では、まだ水位が高く道路の浸水被害が見られました(Pic.4)。10 月中旬にはこの水路が溢れたことでバンコクが危険になりました。調査時点でも、この水路のすぐ南にあるドンムアン空港は浸水していました。

⑤地点：

バンコク市内の西部（チャオプラヤ川右岸側）に位置する BangKae 区の様子です(Pic.5)。この辺りでは道路が完全に冠水していました。また街中では、洪水から守るために土嚢を積んである家が目立ちました。

3. おわりに

今回の洪水について日本では悲観的な報道が目立ちますが、タイでは雨期の洪水は貴重な水資源になり、農業にとって必要なものです。現在タイでは、将来の洪水防止対策として、上流河川への新たなダム建設や、既存の水路を整備して大規模放水路を造るなどの案が検討されています。一方で、渇水時には農業に与える影響が大きく（作付ができない等）、洪水だけでなく渇水にも注目した対策を練ることが重要だといえます。

本調査で得られた情報の詳細については、また別の機会に報告していく予定です。



Pic.2 農地湛水の状況（②地点）



Pic.3 ナワナコン工業団地（③地点）



Pic.4 ランシット水路の様子（④地点）



Pic.5 バンコク市内西部の様子（⑤地点）